

# 1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和5年11月)

野菜振興部 調査情報部

## 【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万3872トン、前年同月比98.6%、価格は1キログラム当たり244円、同106.3%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万7540トン、前年同月比97.2%、価格は1キログラム当たり236円、同109.3%となった。
- 年末年始までは引き続き潤沢な出荷のペースが維持できるが、その後の展開は12月の雨の降り方によると見通している。重量野菜は前進が見られないため、1月は、市場にだぶつく場面はないと予想される。

## (1) 気象概況

上旬は、全国的に天気が周期的に変わり、前線を伴った低気圧が日本海から日本の北を繰り返し通過したため、旬降水量は、北日本日本海側でかなり多く、北・東・西日本太平洋側と東日本日本海側で多かった。一方、沖縄・奄美で少なく、西日本日本海側では平年並だった。東・西日本付近は高気圧に覆われやすく、沖縄・奄美では寒気の影響も受けにくかったため、旬間日照時間は、沖縄・奄美でかなり多く、東・西日本日本海側と東・西日本太平洋側で多かった。一方、北日本太平洋側で少なく、北日本日本海側では平年並だった。また、暖かい空気に覆われやすく、低気圧に向かって暖かい空気が流れ込んだ日もあったため、熊本では5日の日最高気温が30.0℃となるなど、各地で気温が平年を大きく上回る日があり、1946年の統計開始以降、11月上旬として、北日本（平年差+3.6℃）と東日本（平年差+3.9℃）でそれぞれ1位、西日本（平年差+3.1℃）で1位タイの高温となった。旬平均気温は、北・東・西日本でかなり高く、沖縄・奄美で高かった。

中旬は、中国大陸で高気圧が強く、日本付近では低気圧の通過後に西高東低の気圧配置が強まったため、北・東・西日本太平洋側では晴れた日があったが、北・東・西日本日本海側や沖縄・奄美では曇りや雨または雪となった日が多

く、北海道地方では旬の前半に平地でも積雪となった所があった。このため、旬降水量は、北・東・西日本日本海側と北日本太平洋側で多く、東・西日本太平洋側と沖縄・奄美では平年並だった。旬間日照時間は、東日本日本海側で少なく、北・西日本日本海側、北・東・西日本太平洋側、沖縄・奄美では平年並だった。旬平均気温は、寒気の影響を受けやすかった東・西日本と沖縄・奄美で低く、北日本では平年並だった。

下旬は、高気圧に覆われやすく、晴れた日が多かったため、旬降水量は、西日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美でかなり少なく、北・東日本太平洋側で少なかった。1946年の統計開始以降、11月下旬として、沖縄・奄美（平年比4%）で1位タイの少雨となった。一方、北日本を中心に25日頃には西高東低の気圧配置が一時的に強まって大荒れとなった所があり、28日頃には低気圧が通過してまとまった雨が降ったため、旬降水量は、北日本日本海側で多く、東日本日本海側では平年並だった。旬間日照時間は、沖縄・奄美でかなり多く、東・西日本日本海側と東・西日本太平洋側で多かった。北日本日本海側と北日本太平洋側では平年並だった。また、旬平均気温は、寒気の影響を受けにくかった北・東・西日本では高く、沖縄・奄美では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図1）。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本						日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		
東日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	
西日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側				

資料: 気象庁「11月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

## (2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は11万3872トン、前年同月比98.6%、価格は1キログラム当たり244円、同106.3%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(11月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	113,872	98.6	92.8	244	106.3	109.2	257	235	239
だいこん	11,325	104.3	97.6	71	95.0	103.5	75	69	68
にんじん	6,765	91.3	90.4	169	139.0	129.5	176	172	160
はくさい	15,840	119.1	105.4	50	79.7	98.2	60	53	39
キャベツ類	13,489	94.8	89.5	104	128.3	139.1	126	97	90
ほうれんそう	1,789	102.1	109.2	397	94.5	90.6	385	373	441
ねぎ	4,440	86.4	84.6	436	162.7	152.2	383	471	454
レタス類	6,645	101.5	94.2	177	91.2	104.8	181	150	204
きゅうり	4,702	101.7	95.4	333	99.5	99.9	318	326	355
なす	1,824	100.2	96.5	360	105.0	89.7	326	352	421
トマト	3,659	86.2	80.1	527	101.7	106.1	572	486	530
ピーマン	2,339	129.2	119.6	422	92.7	102.1	538	374	353
さといも	817	89.9	83.3	297	109.0	106.7	290	288	312
ばれいしょ	6,191	96.0	93.9	123	111.5	95.9	129	121	120
たまねぎ	6,979	78.2	77.2	189	183.0	179.1	178	193	196

資料: 東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1: 平年比は過去5カ年平均との比較。

注2: 豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、関東産が増量した下旬にやや落ち着いたものの、堅調な動きとなり、やや安めに推移した前年を4割近く上回り、平年を3割近く上回った（図2）。

葉茎菜類は、ねぎの価格が、東北産の減少に関東産の増量が追いつかず、高値が続き、前年を6割以上上回り、平年を5割以上上回った（図3）。

果菜類は、トマトの価格が、高値反動はあったものの、高めに推移した前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った（図4）。

土物類は、たまねぎの価格が、数量不足から堅調な推移となり、前年を8割以上上回り、平年を8割近く上回った（図5）。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

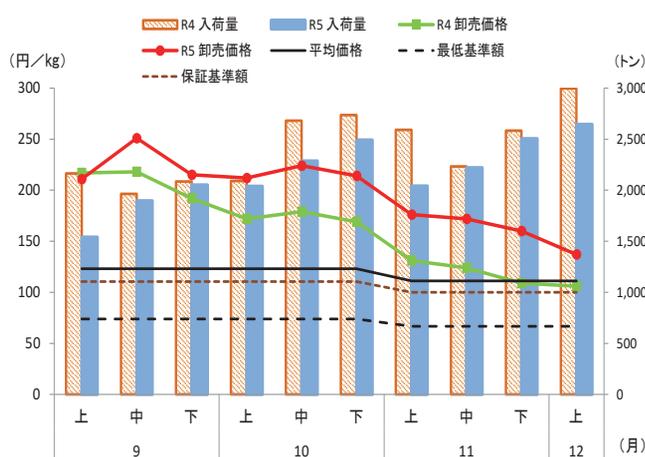


図3 ねぎの入荷量と卸売価格の推移

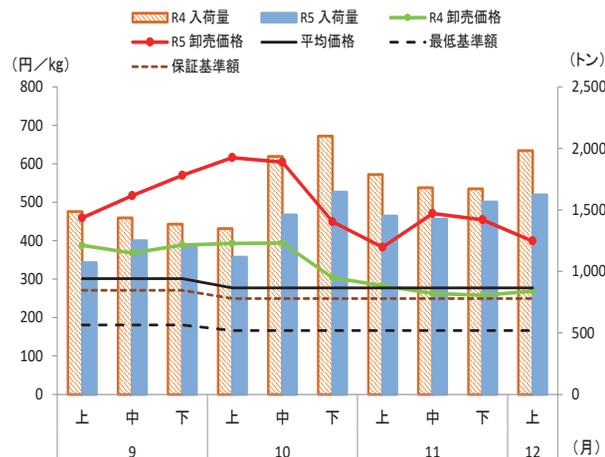


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

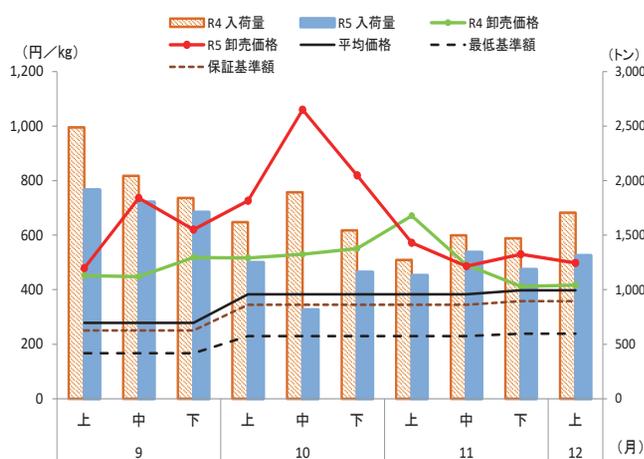
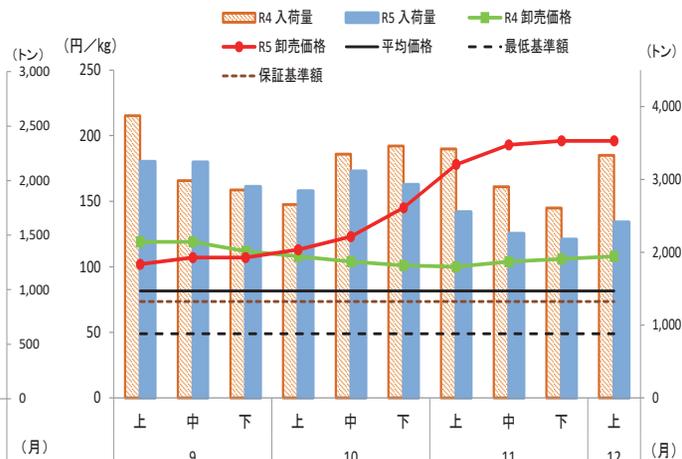


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	11月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>千葉産を中心に神奈川県産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、播種時の猛暑・乾燥の影響により播き直しされた圃場もあったが、その後の天候に恵まれ生育は前進傾向となった。神奈川県産の作付面積は前年並みで、9～10月前半の高温から、その後まとまった降雨はあったものの、それ以降は概して干ばつにより生育が停滞した。10月の適度な降雨により回復し、ほぼ前年並みまで回復した。虫害の発生がやや多かった。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、月間を通して大きな動きはなく、前年をやや下回り、平年をやや上回った。</p>
	にんじん 	<p>千葉産を中心に北海道産の残量の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、播種期の高温・干ばつの影響によりやや遅れていた生育は、その後天候に恵まれ回復した。北海道産の作付面積は前年並みで、低温と日照不足の影響により生育は停滞した。その後的高温・干ばつ傾向により、細物傾向で品質不良も多く、残量も少ない。中国産の輸入が前年の3倍近い入荷となった。総入荷量は前年、平年とも1割近く下回った。</p> <p>価格は関東産が増量した下旬にやや落ち着いたものの、堅調な動きとなり、やや安めに推移した前年を4割近く上回り、平年を3割近く上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年をやや上回り、8～9月の高温および台風の影響により定植、生育、収穫に遅れが見られた。キャベツの播き直しにはくさいを作付けした地区もあったため、面積は増加した。総入荷量は少なかった前年を2割近く上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は、茨城産の増量に伴い下旬に向かって下がり、高めに推移した前年を2割強下回り、平年をわずかに下回った。</p>
	キャベツ類 	<p>千葉産を中心に愛知産、茨城産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は前進傾向となった。愛知産の作付面積は前年並みで、気温がやや高く生育は順調である一方、10月の乾燥の影響により生理障害が見られ、虫害の発生も目立った。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、高温による定植遅れや播き直しの必要性から、一部はくさいを播く地区もあった。総入荷量はやや少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は中旬以降、やや落ち着きをみせたものの、やや高めに推移した前年を3割近く上回り、平年を4割近く上回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>群馬産中心に、茨城産などの入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、露地作を中心に生育はおおむね順調も、一部虫害が散見された。茨城産の作付面積は前年をやや上回り、11月に入っても気温が高く、生育は前進傾向となった。総入荷量は多かった前年をわずかに上回り、平年を1割近く上回った。</p> <p>価格は、潤沢な出回りから苦戦が続き、安めに推移した前年をやや下回り、平年を1割近く下回った。</p>
	ねぎ 	<p>茨城産、秋田産を中心に東北産、北海道産の残量と、関東産の秋冬作の入荷があった。茨城産を中心に関東産の秋冬作の作付面積は前年並みで、7～10月の高温の影響により、生育遅れや病虫害が目立つ。地域間格差もあり、回復傾向にはあるが生育は概して良くない。秋田産を含む北日本地域の作付面積は前年並みで、大雨や高温・干ばつによる生育の停滞から回復傾向となったものの、不作傾向による価格の高騰で、一部産地の出荷を促進した。それにより概して切り上がりも早かった。総入荷量はやや少なかった前年を1割以上下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、東北産の減少に関東産の増量が追いつかず、高値が続き、前年を6割以上上回り、平年を5割以上上回った。</p>
	レタス類 	<p>茨城産を中心に静岡産、香川産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、高温・干ばつの影響により定植や生育に遅れが見られていたものの、9～11月の天候に恵まれて、生育は促進されている。静岡産の作付面積は前年並みで、10月までの干ばつ傾向により生育に地域差が見られたが、11月上旬の降雨で一気に生育が進んでいる。香川産の作付面積は前年並みで、10月の降雨が少なかった影響によりやや生育が遅延した。回復傾向にあるものの、虫害も散見されている。総入荷量はやや少なかった前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は高めに推移した前年を1割近く下回り、平年をやや上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心に群馬産、埼玉産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれて生育はおおむね順調だが、一部病害の発生、徒長や着果不良が散見された。群馬産の作付面積は前年並みで、抑制ものの収穫が終期となった。12月から促成ものを定植する見込み。埼玉産の作付面積は前年並みで、抑制ものの終期となった。定植時から虫害が続き、病害も散見されている。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、前年をわずかに下回り、前年並みとなった。</p>
	なす 	<p>高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、日照に恵まれて生育は順調で、やや前進傾向となった。病害は見られないが、虫害の発生が平年より多い。総入荷量はやや少なかった前年並みとなり、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、関東産が切り上がった下旬に向けて上がり、安かった前年をやや上回り、平年を1割強下回った。</p>
	トマト 	<p>熊本産を中心に愛知産、千葉産、栃木産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育はおおむね順調で、遅延気味から回復した。病虫害の発生は前年並み。愛知産の作付面積は前年並みで、9月の高温の影響により着果不良、裂果が散見された。気温の低下に伴い回復傾向となったが、虫害の発生が多い。千葉産の作付面積は前年並みで、生育は回復傾向にあるが小玉傾向となった。栃木産の作付面積は前年並みで、越冬作は9月下旬以降の気温の低下に伴い草勢が回復し、やや小玉傾向で裂果も見られるが、病虫害は少ない。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割ほど下回った。</p> <p>価格は、高値反動はあったものの、高めに推移した前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
土物類	ピーマン 	<p>茨城産を中心に宮崎産、高知産の入荷となった。茨城産の作付面積は前年並みで、高温の影響による生育遅延からは回復し、おおむね順調であった。病害の発生が多い。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、高温の影響により生育にばらつきが見られる。高知産の作付面積は前年並みで、生育は天候に恵まれおおむね順調。虫害の発生がやや多い。総入荷量は少なめに推移した前年を3割近く上回り、平年を2割近く上回った。</p> <p>価格は中旬以降、西南暖地産の増量に伴い落ち着き、やや高めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに上回った。</p>
	さといも 	<p>埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は順調に進んでいる。高温・干ばつの影響により灌水ができていない圃場は品質良好だが、そうでない圃場の品質はやや良くない。総入荷量は少なかった前年を1割強下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は、やや安めに推移した前年を1割近く上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了。高温・干ばつの影響によりやや小玉傾向となった。品質劣化が多く、発芽が多発するなど選果の効率が上がらない状況となった。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をやや下回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了。高温障害により中晩生品種の作柄が悪く、数量が減少した。中国産の輸入量は前年の2.5倍以上となっている。総入荷量は前年、平年とも2割以上下回った。</p> <p>価格は、数量不足から堅調な推移となり、前年を8割以上上回り、平年を8割近く上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

### (3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万7540トン、前年同月比97.2%、

価格は1キログラム当たり236円、同109.3%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(11月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	37,540	97.2	92.3	236	109.3	115.1	250	231	226
だいこん	3,155	89.9	79.7	97	106.6	123.1	103	93	96
にんじん	2,765	89.8	96.9	165	146.0	131.0	168	166	161
はくさい	6,422	120.0	112.0	66	88.0	111.4	72	68	58
キャベツ類	4,370	103.3	95.3	108	122.7	139.5	143	96	85
ほうれんそう	640	104.9	106.7	467	98.1	89.8	500	417	490
ねぎ	1,023	90.0	90.1	551	149.7	138.3	504	597	555
レタス類	1,253	87.9	82.5	177	92.2	106.6	197	149	184
きゅうり	1,003	100.2	99.4	313	96.9	100.6	311	295	334
なす	585	97.1	117.7	381	108.5	98.1	375	369	404
トマト	1,270	100.1	101.7	469	94.4	97.8	508	423	491
ピーマン	617	127.9	128.4	420	93.5	99.9	546	383	351
さといも	185	88.2	79.2	319	104.2	104.8	333	309	316
ばれいしょ	2,649	98.3	96.4	105	104.0	87.2	106	103	106
たまねぎ	3,994	81.7	80.6	176	160.0	171.1	164	185	186

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	11月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>長崎産を中心として鹿児島産、石川産の残量入荷、後続の和歌山産の入荷も中旬以降に始まった。新潟産や青森産などの前段産地は、前月までの気温高により前進出荷となった上、その後の急激な気温の低下により切り上がりが早かったため、極端に少なかった。主力の産地は各地とも作付面積の減少が進んでいることと、急激な気温変化により太物が少ないため、入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、前月の高値の影響が上旬まで残り、中旬に落ち着くかと思われたが、中旬から下旬にかけて入荷量が伸びなかったことを受けて再び上伸した。月間では高値だった前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	にんじん 	<p>長崎産が中心となり北海道産の残量入荷もあった。北海道産は、前月までの気温高と中旬以降の急激な気温低下により、切り上がりが早く、上旬の入荷量は前年の半分程度、中旬には切り上がり、月間では前年の3分の1程度となった。長崎産は前進傾向で順調な入荷が続き、旬を追うごとに増加し、月間では前年を大きく上回った。入荷量が少なかったため、業務用を中心に輸入の中国産へのシフトも見られた。全体では前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、北海道産の入荷量が少ないことで上、中旬は高値推移となり、前年を大きく上回った。長崎産の入荷増量に伴い下旬にはやや落ち着きをみせたが、月間全体では前年を4割以上上回り、平年を3割以上上回った。</p> <p>なお、年末商材の香川産の金時にんじんは例年通りに入荷がスタートし、やや前進気味の中でも安定して、価格は前年並みとなった。</p>

<p>葉茎菜類</p> <p>はくさい</p> 	<p>茨城産が中心となり、長野産の残量入荷や、後続の三重産や和歌山産の入荷も始まった。長野産は順調な入荷が続いて中旬には切り上がった。茨城産の作付けは例年よりも早く順調なスタートとなり、生育も良好で前進出荷気味で、下旬に入荷増となった。後続産地も前月から11月上旬までの気温高の影響により生育が進み、早いスタートとなった。特に和歌山産が多く、月間では前年の3倍となった。長野産は切り上がりが早かったため減少した。月間全体では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>加工・業務用の発注が少なく、後続の主力産地が入荷増となる中で、価格は旬を追うごとに下落し、月間では前年をかなり大きく下回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
<p>キャベツ類</p> 	<p>愛知産と茨城産が主体となる入荷であった。前段の長野産と群馬産の切り上がりが早く入荷量は少なかった。愛知産は前進出荷傾向で順調な入荷が続き、旬を追うごとに増加し、中旬以降は降雨により肥大も進み、月間の入荷量は前年を大幅に上回った。茨城産は作の後半で作付けが少なく減少した。月間全体では前年をやや上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、前月の品薄による高騰の影響と、前段産地の切り上がりの早さから、上旬までは高値となったが、愛知産の順調な入荷に伴い中旬以降に急落した。しかし加工用の発注が多く、引き合いが強まったことから下げ止まり、月間では前年を2割以上上回り、平年を4割近く上回った。</p>
<p>ほうれんそう</p> 	<p>徳島産が主体となり、福岡産や岐阜産の残量入荷などがあつた。岐阜産は前進出荷で切り上がり早く、月の前半は多かったが後半は少なかった。秋冬の主力産地は、干ばつに加えて前月から11月上旬まで続いた気温高の影響により、播種時期が遅れた地域があり出荷のスタートが遅く、月の前半の入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は、入荷量が伸び悩む中で引き合いが強まらず中旬に落ち込んだことが影響し、月間では前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
<p>ねぎ (白ねぎ)</p> 	<p>長野産が中心となり、群馬産や鳥取産、北海道産の残量入荷もあつた。主力の長野産と鳥取産が夏場の極端な気温高と干ばつの影響により生育不良となり、産地出荷量が少なく、全旬を通して入荷量が少ない状況が続いた。月間では長野産は前年を大きく下回り、鳥取産も前年を大幅に下回り、全体でも前年を大幅に下回った。絶対量不足から、業務関係を中心に輸入の中国産の利用が増えた。</p> <p>絶対量不足に加え、季節商材の主力としての引き合いが強くと、価格は高騰したまま推移した。月間では前年の1.5倍以上の価格となった。</p>
<p>ねぎ (青ねぎ)</p> 	<p>徳島産を中心に主力の香川産や高知産、近隣の大坂産や奈良産などの入荷もあつた。上旬から中旬にかけての極端な気温の変化と、一部地域では雹害もあり、入荷量が少ない中で中旬に特に落ち込んだ。また前月から中旬までの干ばつの影響もあり、産地出荷量が少ない状況が続いた。徳島産は月間では前年を大きく下回った。月間全体でも前年をかなり下回った。</p> <p>価格は、入荷量が少ないことから高値推移が続いた。中旬の入荷量の落ち込みでさらに高騰し、月間では前年を大幅に上回った。</p>
<p>レタス類</p> 	<p>玉レタスのラップ物の主体は兵庫産を中心として徳島産や茨城産、裸物の主体は長崎産が中心となった。量販店の特売などが少なかったため引き合いも弱く、さらに加工用の発注も少なかったため、産地に対して積極的な出荷要請がかけられず、各産地とも旬を追うごとに入荷が減少した。月間全体では前年を大幅に下回った。サニーレタスは福岡産が中心となり、前月から上旬までの気温高の影響により生育は良好で、前進出荷傾向となった。旬を追うごとに減少傾向ではあつたが、月の前半の入荷量は多く、月間でも前年をかなり上回った。リーフレタスも福岡産が中心となり、サニーレタス同様、月の前半が前進出荷で多く、月間の入荷量は前年の1.5倍以上となった。レタス類全体では、玉レタスの入荷量が少なかったことが影響し、前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、玉レタスの引き合いがなかったため伸び悩み、低迷を続けた。サニーレタスとリーフレタスは月の前半の入荷量が多かったことにより中旬に大きく値を下げ、下旬には回復傾向となったが、月間では前年をかなり下回った。レタス類全体では前年をかなりの程度下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心として、高知産や大阪産、上旬までは群馬産の残量入荷もあった。群馬産は切り上がり早く、前年を大幅に下回った。大阪産は全旬を通じて潤沢な入荷で、月間でも前年を大幅に上回った。季節的なものに加えて、前月の品薄感と単価高の影響により量販店での特売需要などが少なく、産地に対して積極的な出荷要請ができなかったこともあり、全体的に入荷量は伸び悩んだ。月間では前年並みとなり、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、各産地とも大きな変動もなく安定した推移であった。月間では前年をやや下回り、平年をわずかに上回った。</p>
	なす 	<p>千両系は、高知産を中心として岡山産などの入荷があった。長なすは、福岡産と熊本産が主体となり、月の前半までは愛媛産の残量入荷もあった。上旬までは気温が高かったが、中旬以降の急激な気温低下による冷え込みで、高知産と岡山産は入荷減となった。月間全体では入荷量の多かった前年をわずかに下回り、平年を大幅に上回った。</p> <p>引き合いがそれほど強くない中でも、品薄感から価格は堅調に推移し、入荷減となった下旬に上伸した。月間では前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに下回った。</p>
	トマト 	<p>夏秋産地は岐阜産を中心とし、産地残量も多く、上中旬は前年の2倍以上の入荷量となった。後続の秋冬産地は急激な冷え込みにより肥大も着色も進まず、この時期の中心となる熊本産が規格外の発生が多く、入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年並みとなり、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、品薄感がある中でも品質低下品も見られたことから伸び悩み、前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産を中心として、高知産や茨城産なども主体となった。前月から上旬までは各地とも気温高が続き、前進出荷傾向で産地出荷量が多い状況が続いた。月間全体では前年、平年とも大幅に上回った。</p> <p>引き合いが弱いことから価格は伸び悩み、中旬に急落し下旬にはさらに下落した。月間では前年をかなりの程度下回り、平年並みであった。</p>
土物類	さといも 	<p>愛媛産が中心となる入荷であった。輸入の中国産の単価が高い影響もあり、給食関係や生協関係を中心とした加工・業務用の国産品の引き合いは強かったが、量販店などの需要は低く、量がさばけないため産地への積極的な出荷要請がかけられず、全体としての入荷量は伸び悩んだ。前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、輸入の中国産の単価高の影響により国産品も高値推移となった。月間では前年、平年ともやや上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は北海道産を中心とした入荷に、下旬から後続の長崎産もスタートした。北海道産は前月に発芽の発生が多く、積極的な販売ができなかったことで伸び悩み、旬を追うごとに減少して、月間では前年をかなり下回った。長崎産は前月から上旬までの気温高の影響により前進気味となり、入荷量は前年の5倍以上となったが、全体としては北海道産の減少の影響により前年を下回った。メークインは北海道産が中心となる入荷で、上中旬は安定した潤沢な入荷が続いたが、下旬に減少した。ばれいしょ全体では前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、安かった前年をやや上回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産が中心となり兵庫産の入荷もあった。北海道産は夏場に続いた悪天候の影響により歩留まりが悪く、全旬とも入荷が少なく、特に中旬には前年の4割以下にまで落ち込んだ。月間でも前年を大きく下回った。兵庫産は潤沢な入荷を続けたが、旬を追うごとに微減傾向となった。それでも前年が前進出荷により少なかったことから、月間では前年の2倍の入荷量となった。北海道産の不作を受けて業務関係を中心に中国産など輸入の利用が増え、輸入品は前年の2倍以上の入荷量となった。しかし北海道産が少ないことが影響し、全体では前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>絶対量不足と大玉が少ないことから価格は高騰し、高値推移の中で旬を追うごとに上伸を続けた。輸入物も単価が高いため全体の価格を押し下げるには至らず、月間全体では前年を6割上回り、平年を7割以上上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

#### (4) 首都圏の需要を中心とした1月の見通し

9月8日頃に全国的な大雨があり、秋冬野菜の定植時期の終盤であったため、圃場によっては不安定になった所もあった。しかしその後の気温が高めで例年になく安定し、実際は干ばつ傾向であった。

「干ばつに不作無し」と言われる通り、物不足による混乱は回避された。年末年始までは引き続き潤沢な出荷のペースが維持できるが、その後の展開は12月の雨の降り方によって決まるとの声が多く聞かれた。重量野菜は前進が見られないため、1月は市場にだぶつく場面はないと予想される。

#### 根菜類



だいこんは、千葉産が年内に1度ピークが来て、その後やや落ち着くと予想される。1月は寒波が予想されるが、例年、年内より減少する傾向である。現状のサイズは2L中心であるが、年明けはL中心となる可能性もあると予想される。神奈川産の生産者は早めに収穫しており、12月の出荷はやや少なくなると予想される。年明けも2Lサイズを中心に出荷のピークとなると予想され、さらに大きなサイズは出荷を控えると予想される。静岡産は夏場の乾燥の影響が残っていることから、肥大が遅れ気味で出荷のペースはゆっくり気味である。ピークは1月に入ってからで、2月中旬には減ると予想される。今年の出荷は特別多くないと予想される。

にんじんは、千葉産は12月に入ってピークとなり、平年並みの状況である。播種作業も問題なく終了しており、年明けから2月まで例年と同様の出荷ができると予想している。品種は「ベータ系」で、Lサイズ中心の見込みである。埼玉産は年明けの出荷が中心で、2月に入って減ってくると予想される。現在出荷されているのは夏の高温期に播種したもので、品質はそれほど良くないが、今後徐々に回復すると予想される。中心サイズはL、次に多いのが2Lである。作付けは前年の150%と大幅に伸びている。



#### 葉茎菜類

キャベツは、愛知産は適度の降雨もあるなど天候に恵まれ、現状の出荷は例年を上回っている。年明け以降も順調で、出荷の谷間がなくほぼ定量で2月まで推移すると予想される。8玉サイズが中心で、今年は6玉サイズも多く豊作型である。千葉産の生育は順調で、平年並みの出荷であるが、若干前進気味である。降雨は少ないが朝露があり、肥大も問題なく8玉サイズが中心である。1月の出荷量は、クリスマス寒波が強ければ生育全般が遅れて少なくなると予想される。逆に暖冬となれば、1月の出荷は多くなると予想している。神奈川産は、猛暑により7月まで播種できなかった。8月に播種したものは順調で、現状は10月の降雨もあって平年並みかやや多くなっている。この早春キャベツは2月まで順調に出荷されると予想される。

はくさいは、茨城産は出荷開始当初は遅れたが、11月後半にはかなり増えてきた。遅れて定植したものが高温・干ばつで追いついた。12月から1月にかけても問題なく順調に出荷されると予想される。1月後半から減り始め、切り上がりが早まることも予想される。

ほうれんそうは、群馬産の出荷の現状は平年と同様であるが、寒さが継続すれば特別前進することはないであろう。当面のピークは年末年始で、例年と同様1月に若干減り、2月には増えるといった展開と予想される。作付面積は前年並みで、播種も順調に行われている。埼玉産の現状は7～10日前進しているが、12月に入って気候も締まり、出荷のペースは緩むと予想される。10月末頃に播種した年末年始の出荷ものに前進はなく、1月は平年並みの出荷と予想している。栃木産の現状は、生育期の気温が高かったため、2Lサイズが多く出荷されている。11月下旬から天候が締まって、出荷はある程度抑えられると予想される。年明けはトンネルもの（トンネル状に被覆資材を掛けて栽培したもの）が始まるため、数量は横ばいで減少することはないと予想される。「ちぢみほうれんそう」の作付けは前年並みで、12月15日頃から始まって、1月は前年並みの出荷を予想し

ている。

ねぎは、千葉産は現状徐々に増え始めているが、1～2月も前年を上回る出荷は望めない。年内は前年の50%、年明けは80%程度と予想される。降雨が少ない影響によりLサイズ中心の出荷と予想される。埼玉産の夏ねぎは高温と少雨により太りが悪く、害虫の発生もあり少なかった。11月初めから始まった秋冬ものは、出荷当初はダメージが残っていたが、12月に入りかなり回復してきた。今後は例年と同様、太物を中心にほぼ平年並みに回復すると予想される。茨城産は予想より早く平年並みに回復してきた。11月の温暖な天候が幸いした。12～翌1月をピークに、Lサイズ中心で、2Lが少なくMサイズが多い出荷と予想される。

レタスは、静岡産の現状は出荷が始まって間もないが、量的にはピークに向かっているところである。12月中旬には量的にかなりまとまって安定し、年明けから2月中旬まで同水準の数量で推移すると予想される。乾燥気味の天候のため、多湿を嫌うレタスにとっては10年に1度と思われるほど生育環境が良い。出荷量は大き玉に仕上がった前年を箱数では下回ると予想される。長崎産の現状は前倒しの出荷であるが、定植時期の高温の影響により結球不良などが見られ、出荷量は伸びていない。年末年始頃になって品質は回復してくると予想している。それでも年末年始は一旦減少傾向となり、1月下旬頃～2月にかけて増える見込みである。サイズは12玉入りの3L中心で平年並みである。香川産は暖冬の始まりで、7日程度前倒しで出荷されている。定量出荷されており、このピークは2月まで続く見込みである。サイズはLが60%、2Lが20%であり、夏場の乾燥の影響により若干小さめである。

## 果菜類



きゅうりは、群馬産の最も早い出荷は12月から始まるが、1月15日から増え始め、2月10日頃に出揃い、出荷のピークは3月に入ってからと予想される。作付けは前年並みである。現状までは天候も含めて生育上のマイナス要因はない。高知産の生育は順調で、平年並みの出

荷となっている。11月までは早まることも遅くなることもなかった。年内の12月下旬にピークが来て、さらに3～4週間後の1月下旬に再びピークが来ると予想される。

なすは、高知産は10月に前進した影響により11月の出荷は少なかった。現状気温は高く、12～翌1月は盛り返してくると予想している。前年は12月と1月に寒波が入り、出荷は大きく減少した。今年は寒波がなければ、前年を上回る出荷と予想される。福岡産の現状は7日以上前進している。年末から年始にかけて減り始め、1月は出荷の谷間となり、2月に入り再び増えると予想される。作付けは前年並みである。

トマトは、千葉産は引き続き抑制もので、12月末頃まで多く、1月まで出荷されると予想される。量的に前年の80%程度と不作傾向である。12月末頃から越冬の半促成物も始まり、生育は順調で、2月下旬からがピークと予想される。愛知産の現状は若干少なめの出荷となっているが、12月に入り回復してくると予想される。生育そのものは順調であるが、1月中旬以降は若干減ってくると予想している。作付面積は前年並みで、M・Lサイズ中心の出荷と予想している。熊本産の現状は平年並みの出荷となっている。ピークは年末年始に1度来て、その後2月までは平年並みと予想している。現状のLサイズ中心から、年明けはMサイズ中心と予想される。ミニトマトは、熊本産は10～11月の降雨が少なかったが、当初の遅れは回復してきている。11～12月はピークが続き、1月中旬まで潤沢なペースが続くと予想される。その後やや落ち着いて、4～5月になって再び多くなると予想している。

ピーマンは、高知産の最初のピークは一旦終了し、再び増えるのが12月中旬頃と予想している。年明けは1月上旬に多く、その後減少すると予想している。樹勢の状態は問題なく、例年と同じような推移と予想される。宮崎産は例年通り始まり、11月は前年を上回った。12月15日以降クリスマスにかけてがピークと予想される。年明けは15日前後から下旬に向けて再びピークとなると予想される。成り疲れも懸念されるが、天候が安定しているため1月も順調な出荷と予想される。茨城産の現状は例年より少なめであるが、12～翌2月は前年の90%

ペースと予想される。単収は変わらないが、面積の減少や担い手不足が見られる。出荷増は2月後半の半促成栽培ものが始まってからと予想される。

## 土物類



さといもは、埼玉産のいるま野農協管内の園地は、灌水設備がほぼあるため問題ないが、設備がない園地は不作である。1月は前年を下回る可能性があるとして予想される。

ばれいしょは、北海道産の「男爵」は平年作であったが、年内の処理がやや遅れたため、年明けの出荷はやや多くなる可能性がある。中心サイズはLである。ねっとり系で、煮物に適している「きたかむい」は平年作であるが、作付けは増えてきている。鹿児島産（出水）の早春ばれいしょ「ニシユタカ」の販売が年始から始まるが、凍害もなく生育順調である。ピークは2月上旬と予想され、肥大は順調と予想している。作付けは前年を上回っている。鹿児島産（徳之島）は高温により植え付け遅れとなり、例年1月下旬から始まるが、10日程度の遅れで2月初めからと予想される。「ニシユタカ」は問題なく順調である。

たまねぎは、北海道産の通常の倒伏（収穫時期が近付くと葉が倒れる）の始まりは、早生ものが7月中旬からとなるが、今年は夏の猛暑により8月初めに一斉に倒伏が始まる異例の展開となった。そのため晩生品種に後期の肥大がなく、小玉の仕上がりとなっている。現状の生産予想量は、やや豊作であった前年の90%前後である。静岡産は「ホワイト」が順調で12月から始まっている。1月いっぱい終了するが、作付けは前年並みで前年を上回ることはないと予想される。「黄玉」は年明けすぐの出荷となるが、生育は順調で、作付けも増えて前年を上回ると予想され、1月後半から2月中旬過ぎまでがピークと予想している。「ホワイト」は2Lサイズ中心に、「黄玉」はLサイズ中心の出荷と予想される。

## その他



ブロッコリーは、愛知産は雨で定植が遅れた分の出荷が終わり、11月末頃から増えて12月には回復すると予想される。干ばつではないため、花蕾の大きさは平年並みである。1月は12月よりさらに増えて3月までこのピークが続く見込みである。熊本産は暖冬で前進したことにより11月初め頃までがピークとなった。年明けはどこかで出荷の谷間となる時期も想定されるが、引き続き潤沢な出荷のペースが維持されると予想される。3月中旬から少なくなって、4月に端境期となると予想される。香川産は12～翌1月はピークがなく、寒さで落ち込む時期がある可能性もあるが、平年並みの出荷と予想される。1月出荷分が年内に前倒しされることも予想されるが、大きな前進は見られない。サイズはL中心と例年並みである。

カリフラワーは、福岡産は現状までのものは夏の猛暑の影響を受けたが、12月には回復すると予想される。ピークは1月～2月中旬で、前年並みの出荷を予想している。

セルリーは、静岡産の生育は順調であるが、現状は減っている。12月下旬から増えて1月までピークを維持し、2月に入り減ってくるとして予想され、ほぼ例年と同様のパターンである。

かんしょは、千葉産の年明けは「紅はるか」が中心になるが、「紅あずま」が減った分、多くなると予想している。貯蔵もの出荷となるが、形状の乱れなど高温の影響が若干あったものの、平年作である。サイズはL中心と予想される。石川産の「五郎島金時」はほぼ例年並みの出荷となっている。1月前半は生産者の正月休暇で出荷が少なくなるが、中旬ごろから増えて2月いっぱいピークと予想される。今年は干ばつの影響により、弓なりなど形状に乱れが見られ下位等級品が多いが、かんしょそのもののサイズは例年どおりL中心の見込みである。

たけのこは、熊本産の2024年は裏年で、全体として少ない予想である。12月20日には出荷開始の予定であるが、前年より遅い。年明け1～2月の早期ものはほぼ前年並みの出荷を予想している。

ナバナは、千葉産の現状は降雨が少ないことにより例年の70%程度と少ない。1月も雨次第である。当面のピークは節句を前にする2～3月である。出荷の荷姿は、結束、パック、袋、バラであるが、量販店にはパックと袋入りが受け入れられやすい。

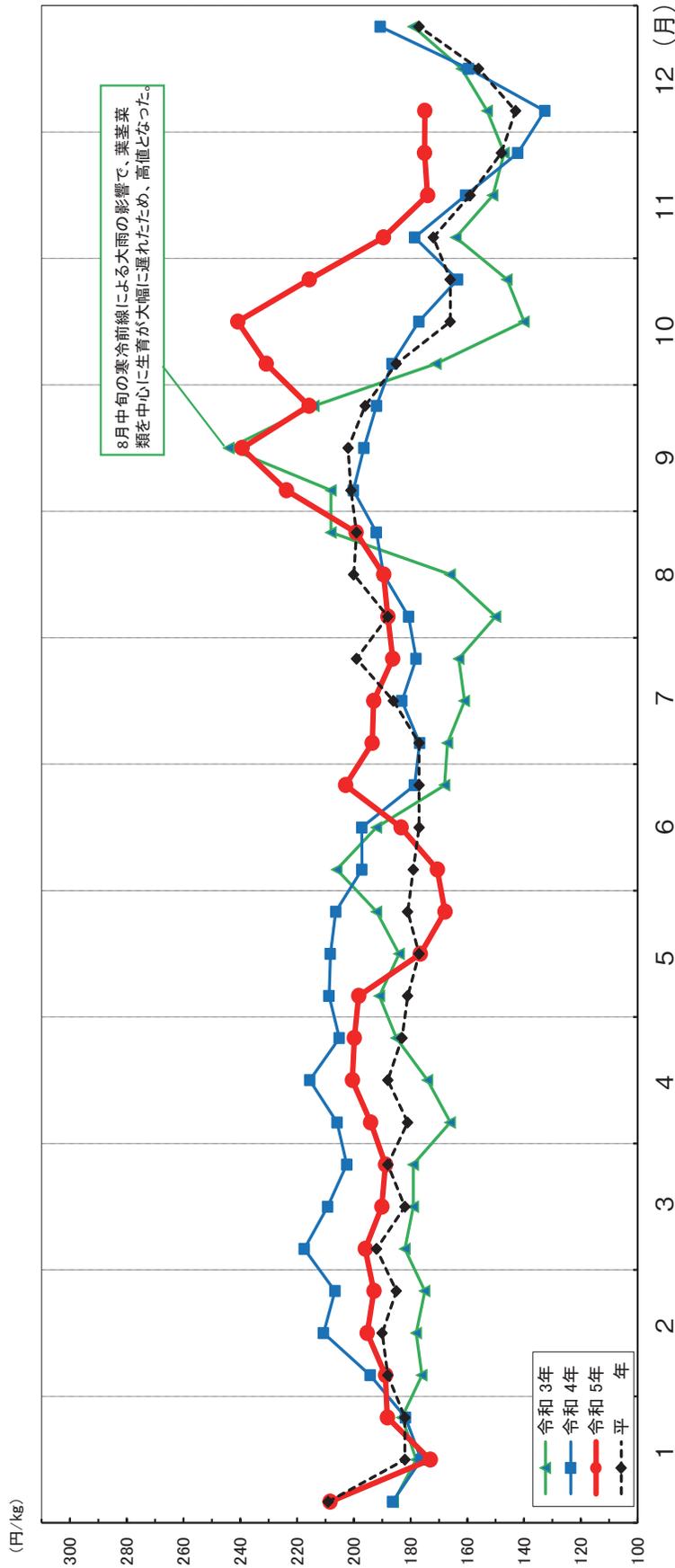
グリーンピースは、鹿児島産は12月中旬から増えて1～2月中下旬にかけてピークと予想される。「スナップえんどう」は12月にピークが来て、1～2月と多く、横ばいで推移すると予想される。天候に恵まれ例年並みの出荷と予想される。

そらまめは鹿児島産が12月初めから始まり、年明けから量がまとまり、2月に増えて3月中下旬から4月がピークと予想される。

さやいんげんは、沖縄産は気温高が生育にマイナスとなり、出荷は後ろにずれて12月中下旬からと予想される。生産者の高齢化により作付面積は減少している。ピークは3月中下旬と予想される。

(執筆者：千葉県立農業大学校  
講師 加藤 宏一)

## (参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

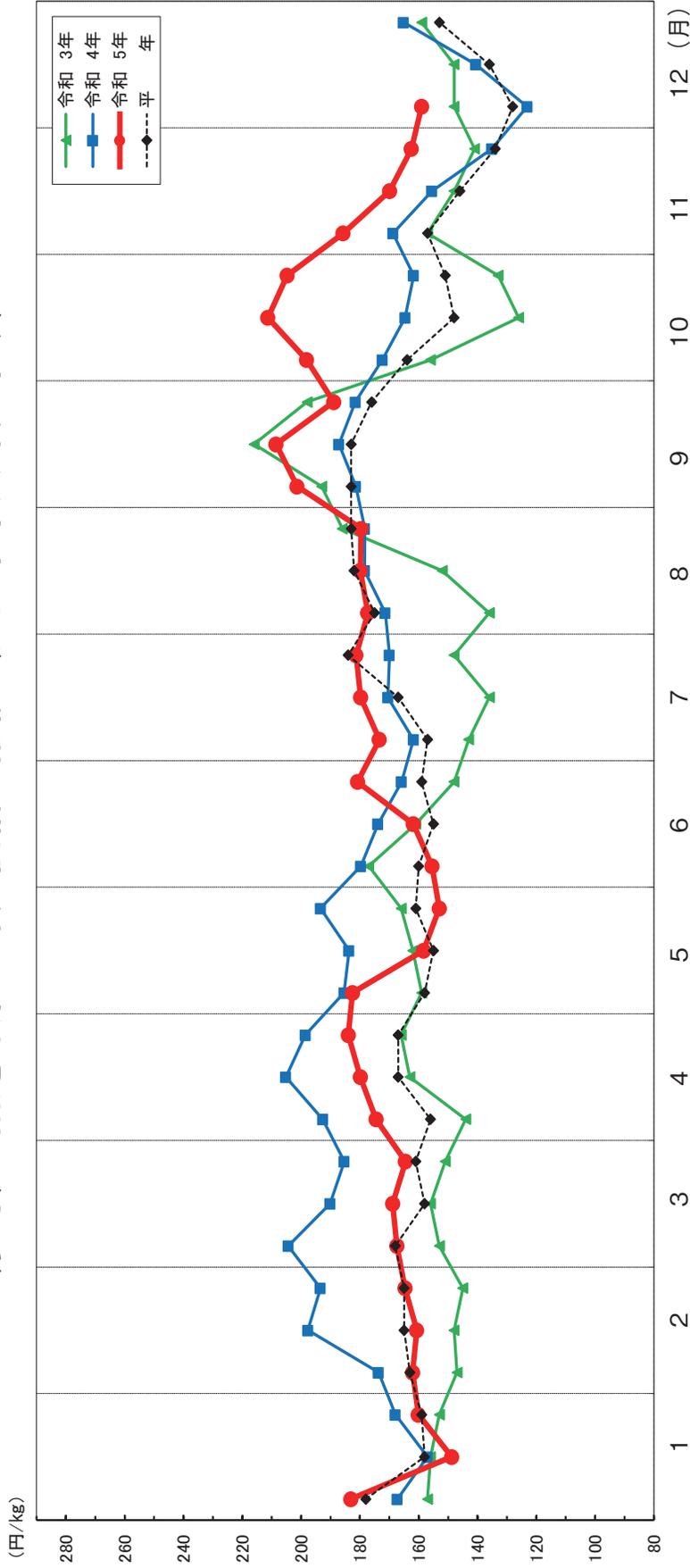
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月																
	上旬	中旬	下旬																																				
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179		
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	200	196	187	177	163	179	161	142	133	160	191	
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175					
平年	209	182	182	188	190	185	192	182	188	181	188	183	181	177	181	179	177	177	186	199	188	200	199	201	202	196	185	166	166	172	159	148	143	156	177				

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

# (参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬																																	
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159			
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165	
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159			
平 年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。